

えいせいぶん こ
永青文庫所蔵
細川家伝来「忠利公御間縄」

山 岸 素 夫

1. はじめに

（財）永青文庫に細川家伝来の間縄がある。付箋に「忠利公。御間縄」と墨書されている。

忠利公とは、肥後の国主細川家の第三代である。忠利は天正14年（1586）10月、忠興の第三子として丹後宮津に生れた。母は有名なガラシャ夫人である。関ヶ原の役には14才で初陣し徳川秀忠の軍に従った。戦役の後、父忠興が豊前国に封ぜられ、39万9千石を領するに及び中津城を預った。元和7年（1621）家督を嗣いで小倉に在城。寛永9年（1632）6月の加藤氏改易の後、肥後54万石を与えられ、同年12月熊本城に入った。

忠利は肥後藩主として9ケ年在任し、寛永18年（1641）3月、56才で逝去したが、この間に、人畜改帳・地撫帳ぢならしちようなどを作り、土地制度の改革を行ない、支配機構確立のために諸制度を刷新整備した。また、殖産興業につとめるなど民政にも意をそそぎ、肥後細川藩の基礎を固めた。

付箋によると、この間縄——以下本品と呼称する——は、忠利在任時代の間縄と解されるが、そうすると、忠利が肥後入国後の寛永10年から同20年にかけて行なわれた地撫帳作成の際の丈量に用いられた可能性もある。この当否については、文献による検証が必要であるから専門家の研究にまきたいと思う。

本品は遺物の少ない江戸時代の間縄の例品として貴重な存在である。しかも、保存状態は極めてよい。これをそのまま秘蔵するのは、いかにも惜しい気がするのでここに紹介することにした。

しかし、間縄はいうまでもなく計量具に関する知識の乏しい筆者が本品について記述するのはおこがましいこととお叱りを受けるかも知れない。

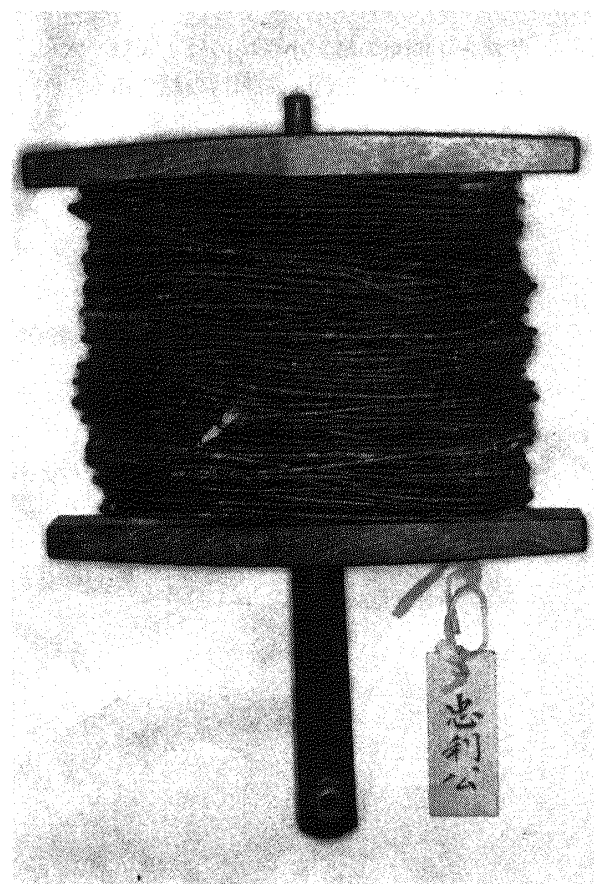
よって本稿では私見を加えることを差し控え、本品の現状を有るがままに記し、計量史家の参考

に供するとともに御示教を仰ぐことにした。

2. 構造と寸法

本品は1間毎に標（間札）を付けた間縄とこれを巻く簀からなっている。

まず、間縄についてみると、素材は麻糸である。3本を甘く撚り合せた太さ2mm弱の麻縄の芯の上に、太さ1mm弱の細い麻糸を極めて密に、かつ、固く巻詰め、表面は生漆をもって塗り固めている。これは弓弦の関弦に類似した手法である。湿気を防ぎ、摩擦に強く、丈量の際に大きな力が加えられても引切れる恐れはあるまい。針金が芯

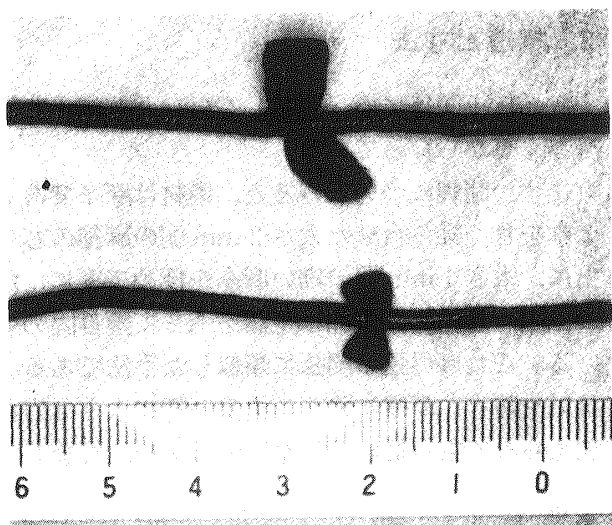


簀に間縄の巻かれた状態

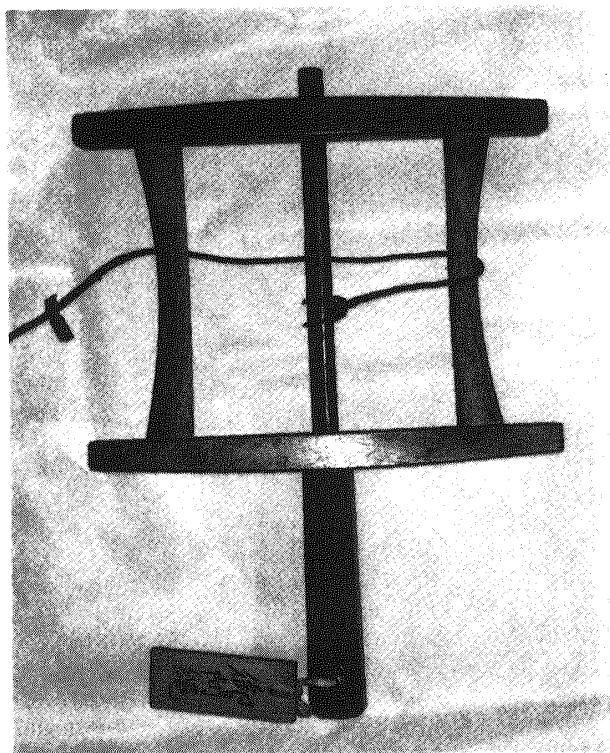
に入っているのではないかとと思われるほど強固な麻縄である。その太さは手作りらしく一様でなく 2.5 mm から 3 mm である。

本品の総間数は30間であるが、さらに、使用上の便から両側に遊びの部分をつけている。先端に約50 cm、内側に約 28.5 cm、この先に蛇口を設けて簀の心棒に搦めている。

1 間毎の標は、紫草の細片 ― 幅約 5 mm、長



間縄と 1 間毎の標。小さいのは 1 間毎、大きいのは 10 間、20 間、30 間目の標である。



簀と心棒に取付られた間縄の状態

さ 15 mm から 20 mm ― を用い、間縄の芯の上に巻いた麻糸の間に挿み込んで巻留めている。

ただし、10 間目、20 間目、30 間目の区切りには、幅約 7 mm、長さ約 25 mm と少し大きい紫草を取付け、丈量の際に間数の読み取りが誤りなく容易にできるよう配慮している。

計量史家が最も関心を寄せるのは 1 間分の長さであろう。曲尺の幾尺幾寸に相当するか、研究家ならずとも興味をそそられる。

筆者はまず 30 間分の総長を計測して平均値を出すことにした。全長 10 m の麻布の巻尺を用いて計測した数値は 58.9 m であった。

本品は特殊な作りの強固な麻縄であることと、長期にわたり簀にまとわれていたため、内側にいたるほど巻癖が強い。計測に当り巻癖の修正には十分留意したつもりであるが、多少の誤差はまぬがれまい。完全に巻癖を修正すれば、これより多少伸びることと思われる。

さて、58.9 m を 30 で割った平均値は 196.3 cm である。曲尺に換算すると 6.48 尺となり、6.5 尺に僅か足りない。

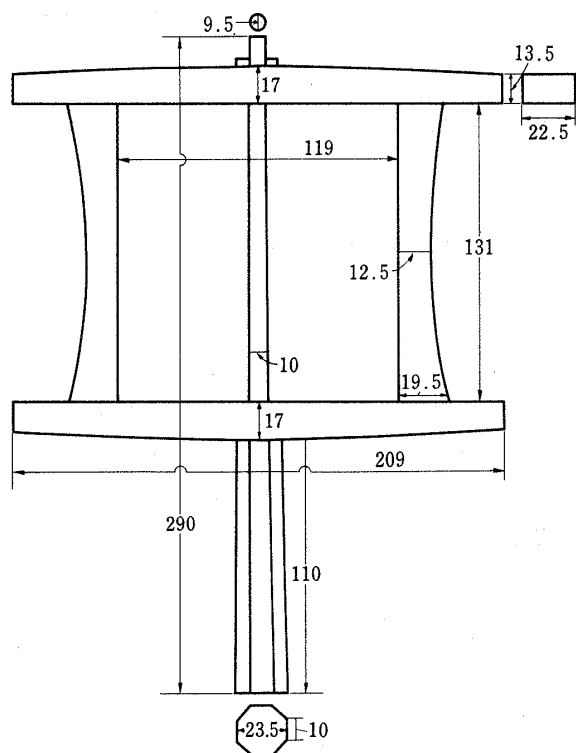
次に、10 間分を任意に選び出し、1 間毎に計測した数値は次の通りである。長い所と短い所では数 mm の差がある。この 1 間分の平均値は 196.58 cm、曲尺では 6.487 尺になった。

単位 cm

1.	1 9 6. 4
2.	1 9 6. 8
3.	1 9 6. 5
4.	1 9 6. 5
5.	1 9 6. 0
6.	1 9 6. 8
7.	1 9 6. 8
8.	1 9 6. 8
9.	1 9 6. 6
10.	1 9 6. 6
計	1 9 6 5. 8

3. 巻枠について

簀は今日「おだまき」と呼ばれているものとは異なる。写真のように、上下の横木の間に堅木を組み入れ、心棒を通しただけの簡単な構造であるが、熟練した職人芸を感じさせる手際のよい作り



簀の寸法 (mm)

である。用材は栗であろう木目の詰んだ堅木で木肌は白い。柄と心棒は櫟の一木造りで透漆を塗っている。

柄は八角形をなし、上へ向けて少しずつ太さを減じている。下方に小孔を穿ち、銀地八弁透彫の花形座に小刻座付の鷲目を打っている。腕貫緒を通す孔である。

心棒は径10mm、先の方を心持ち細め、上部に打った栓によって簀の脱落を防いでいる。簀は心棒を軸として左右自在に回転するが、簀の横木の中央部は両端より3.5mm厚く、その分だけ外側へ弧を描いて脹らんでいる。何でもないのでこの脹らみは実に功妙な工夫である。柄と栓との間の摩擦が軽減し、回転が円滑になるとともに、見た目にも美しい。

また、間縄をまとう堅木も単なる角棒ではない。縄に当る外面は隅を削り落して丸味をつけカマボコ形をなすとともに、中央部がゆるく内側へ凹み、いわゆる糸巻状をなしている。これによって間縄が巻き易くなることは間違いない。

このような単純な機構の実用品に示された、用と美へのこまやかな心配りと優れた美意識に、今さらながら頭の下る思いがする。

4. 結 び

以上、永青文庫所蔵、細川家伝来の「忠利公御間縄」を紹介した。できるだけ詳細にと心掛けたが、筆者の計量具に関する知識の乏しさと専門用語の不知から、表現が煩瑣となり、また適切を欠いた点もあると思う。

しかし、本品の形態機構は一通り述べたつもりである。

これが計量史家の研究の一助になれば幸である。

〔補 注〕

わが国の検地尺で使用された年代のわかっているものはきわめて少く、ことに1間の基本である尺はわかっている、測量の実際に用いる間尺や間縄の単位目盛は、しばしば変更されている。中世は6尺5寸間であったものが、太閤検地では6尺3寸間とされ、江戸時代に6尺となったとされてはいるが、測量の実態はまちまちであったことが指摘されはじめている。

この意味でこの山岸氏の報告は重要である。もしこの間縄が細川忠利の時代に用いられたものとすれば、江戸時代においてもなお太閤検地以前の6尺5寸間縄が用いられていたことになる。

なお氏の実測値によると、今日の間に対し平均1分ほど短い、巻きぐせ、経年変化、当時の尺のばらつきなどを考慮に入れても、きわめてよい精度であるといわなければならない。山岸氏は東京在住の鐘の研究家である。

(小泉)

Measuring Rope used in the Fief of Hosokawa in the Edo Era

Motowo Yamagishi

The unit of the length of measuring ropes for the assessment of taxation used since the medieval ages in Japan was often changed. But it was not actually clear because the real articles were yet to be discovered. Mr. M. Yamagishi, however, has found out a perfect measuring rope at the ancient warehouse of the Hosokawa feudal clan in Kyushu. A "ken" of the rope is about 196.6 cm long and it had been used before Hideyoshi standardized a "ken" by 190.9 cm.